



溝口勝教授
(農学生命科学研究科)

84年農学系研究科(当時)博士課程中退。農学博士。内閣府総合科学技術会議参事官補佐、情報学環境教授などを経て、10年より現職。

研究室 散策

@国際情報農学

のどかなイメージのある農業も、最新技術を使ってより効率性、安全性を高める研究が進んでいる。環太

情報技術で農地管理

口勝教授(農学生命科学研究科)に話を聞いた。

平洋パートナーシップ協定(TPP)妥結の大筋合意によって、効率よく国際競争力の高い農産品を作る技術には社会的関心も高まる。情報技術を使って効率的な農地の管理を目指す溝

口勝教授の研究室では多角的に農業を改善する取り組みを進めている。その一つが国内や東南アジアなどの各地の農地に観測機を設置し、気温や雨量などのデータを監視することで自然条件が作物に与える影響を軽減する活動だ。データ送信には一般の携帯電話回線を利用して、電源には太陽電池を使うため場所を選ばず設置できる。シベリアで観測機が動かなくなった経験などから改良を重ねてきたものから観測データや観測機の

カメラで撮った写真は研究室のウェブサイトに(<http://www.tai.ri.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/mizolan.html>)から閲覧できる。

最近の溝口教授の活動の中で大きなテーマが東北の復興だ。「土壌の高い放射線量で知られる福島県飯館村にはほぼ毎週末行きま

す」。溝口教授はもと専門の土壌物理学の理論に基づきローテクな農地除染法を地元へ提案。行政や業者に頼らず農家自身でもできる簡単な方法だ。「行政任せきりでなく、当事者たちで農業が再開できるように真方に徹しながら行

「研究をするには現場がど溝口教授自身が行っていない分かっていなければいけません。設置ではセンサーの深さ、野生動物が観測機と干渉する影響など自分で現場を見なければ分からないことも多い。「研究に使うデータも自分で集めるのが原則です。実際に農地に出て汗を



観測機のカメラで撮ったインドネシアの農地(上)と飯館村松塚(研究室ウェブサイトより)

るという少子化対策がある人でもできることがある。かき作業するといえ、世間的な東大教授のイメージと真逆の泥臭い仕事ですね(笑)

研究室の学生は、小学生が農業を学手法や青森県の伝承的リンゴ栽培法など自由研究テーマを設定している。東大の食糧で提供されているタイ産のホウレンソウの生産から流通まで電子掲示板で知らせる仕組みを作るなど、身近で活躍する卒業生もいる。「研究室の名称にある国際情報農学は全く新しい学問で、伝統的な研究室と違って決まった研究手法はない」と小原寛士